

宮崎八郎と植木学校

— 歴史を訪ねる旅 (14) —



下土橋 渡

征韓論争で政府が分裂し、西郷隆盛、板垣退助、江藤新平らが下野した年の翌年、明治7年(1874年)に佐賀の乱が勃発します。風雲急を告げるこの年に、ルソーの「社会契約論」の部分訳である中江兆民の「民約論」を泣きながら読んだ23歳の宮崎八郎という、肥後国玉名郡荒尾村(現熊本県荒尾市)出身の男がいました。ルソーの社会契約論は簡単に言うと「国家は人々の契約の上にあると考える政治思想」で、フランス革命の理論的根拠になったものです。

1

「これぞ自由民権のよりどころ」と叫んだ

八郎は、翌明治8年(1875年)、植木(熊本市植木町)に「植木学校」を設立します。入学してきた50〜60名とも80名ともいわれる熊本城下の士族、熊本県北部の郷土の子弟に、ルソーの「民約論」や頼山陽の「日本外史」、福沢諭吉の著書などをテキストにして、自由民権思想を教えます。ところが、授業ばかりでなく、県民会の開設要求や戸長(現在の町村長にあたる)の公選要求を行い、戸長征伐の指導的役割を担うなど、過激な活動が県を刺激したため、当時の県令(現在の県知事)によって植木学校は開校半年で閉校させられました。

明治10年(1877年)に西南の役が勃発すると、八郎は熊本協同隊を結成しその参謀長として薩軍方につき参戦します。協同隊は2月21日に薩軍と川尻(熊本市)で合流。

一方、政府軍は薩軍の補給路を断ち、北と南

から薩軍を挟み撃ちにするため3月19日に二見洲口の海岸（熊本県八代市）に衝背軍を上陸させます。そこで薩軍本営は、政府軍の背後に回り込んで挟み撃ちにすべく、別府晋介らとともに、宮崎八郎に八代行きを命じます。4月6日、球磨川の萩原堤（熊本県八代市）で八郎戦死。志半ばの27歳でした。

徹底した「官嫌い」な八郎ではありませんが、西郷が自由民権論者ではないことを百も承知の上で何故薩軍方として西南の役に参戦したのか。西郷にいったん天下を取らせたのち、西郷と競って天下を取る、新時代に臨む宮崎八郎という男の構想は遠大なものでした。

八郎の死を知ったときの父・政賢まさひさの怒りはすさまじく、庭に家人を集めて「一生『官』のメシを食ってはならん」と怒鳴りまくったと言われます。八郎の生き方は、宮崎民蔵みやざきたみぞう、宮崎彌蔵みやざきやみぞう、宮崎滔天みやざきとうてんの3人の弟たちに大きな

影響を与えました。弟たちは、事あるごとに「豪傑になれ、大将になれ」「アニさまのようになれ」と言い聞かされて育てられたといわれます。アニさまとは八郎のことです。

宮崎八郎戦没の地、植木学校跡、山鹿の光専寺、宮崎兄弟の生家を訪ねました。

一、宮崎八郎戦没の地

八代城（1622年竣工）が球磨川の河口部に建設されたとき、球磨川の洪水から城下町を防護するために築造された堤の一つが萩原堤で、景勝の地として知られています。その萩原堤に司馬遼太郎氏の書による宮崎八郎戦没の碑が建てられています。碑文に以下のようにあります。

此処萩原堤一帯は明治十年西南の役に於て田原坂と共に多数の死傷者が出た激戦地である。当時熊本協同隊の参謀長であった宮崎八郎は薩軍を援助して奮戦したが四月六日の



宮崎八郎戦没の碑（熊本県八代市萩原堤）



球磨川と「名勝・萩原堤」の標柱

拂曉遂に此の地で戦没した。時に弱冠二十七八歳であった、因みに後年中国革命の父孫文と交友深く活躍した宮崎滔天はその実弟にあたる。茲に一同相諮りその遺跡を後世に伝うべくこの碑を建立するものである。平成元年四月六日。八代市萩原老人クラブ。

二、植木学校跡

熊本市植木町の植木小学校近くのマンシヨンの駐車場に隣接して「植木学校跡」という石標と説明板が立っています。自由民権運動家・宮崎八郎は、平川惟一らと、熊本民権党の組織化をはかり、その同志たちの結束と民権主義者の育成拠点として、「植木学校」の開校を計画しました。明治8年（1875年）年4月、許可を得て、旧正院手永会所跡に變則の県立「植木中学校（通称、植木学校、公式には熊本第五番中学校）」を開校。教科書には文明史、万国史、万国公法、万法精理（モン

テスキュー）、自由之理（ミル）、民約論（ルソ）の翻訳や日本外史、日本政記の漢籍、福沢諭吉の著書などが使用されたといわれます。説明板に以下のようにあります。

同校は宮崎八郎等の熊本民権党が中心になり設立、運営した極めて先進的な学校で、中江兆民の訳によるルソーの「民約論」を経典とした。自由民権主義者の養成所として植木学校の名は高まり、盛時には80名近くの若者が在籍していたという。しかし、鹿児島市学校と気脈を通じ、戦闘訓練を行なう等したことから、県と反目して補助金を打ち切られ、同年10月末、僅か半年で閉校するに至った。同校の関係者は城北の農民一揆「戸長征伐」を指導、明治10年の西南の役では熊本協同隊を組織して薩軍に参加し、後には自由民権思想の普及に尽力した。平成三十一年三月 熊本市。



植木学校跡・石標と説明板（熊本市植木町）



植木学校（変則第五番中学校跡地）の石標

三、光専寺

熊本県山鹿市に光専寺という浄土真宗本願寺派の寺院があります。かつて一万人集会の場となったお寺で、西南の役が勃発すると薩軍野戦病院になりました。また合戦中、山鹿の町で熊本協同隊の有志によって自治制の試みがなされた時、寺の一室を借りてその会合が行われたといわれます。

一万人集会というのは、当時城北各地に地租改正と民費増徴等のかたちで収奪が強化されたため、それを不満とする農民の騷擾そうじょうが次々に起きました。その総決算ともいべき大抗議集会でした。それをリードしたのはかつて植木学校に学んだ民権党の連中でした。郡内の戸長役場はそのために動揺し事務処理も出来ない状態になりました。県ではそれを鎮圧するため集会禁止令を二回にわたって出し

ましたが一向に収まらず、郡内外を合せて一万人が集まったといわれます。農民たちの気迫に押されて、責任のある戸長等を嚴重に処分することが約束されました。農民たちは歓声をあげて解散、数日後西南の役が勃発すると、騷擾をリードした民権党員は熊本協同隊を組織して薩軍に参加しました。

いかにも民権組織らしく、協同隊の幹部役員は投票により選出されました。小隊長は平川惟一（総指揮長）で実質的な最高司令官。本宮付は協同隊本部を構成し、参謀長の宮崎八郎は薩軍との連絡調整に当たりました。協同隊の結成が知れると、たちまち入隊希望者が押しかけ、最終的に四百人を超えたといわれます。

平川惟一の率いた協同隊は二月二十三日、薩軍の先鋒として熊本を出発、豊前



光専寺山門



山鹿の町並みを彷彿とさせる光専寺の門前通り

街道を北へたどって翌日山鹿に入りまし
た。桐野利秋の率いる三個小隊が二日遅
れて到着。薩軍は、桐野利秋が総帥とし
て、最強の四番大隊を主軸とする軍団と
熊本協同隊、飢肥隊を率いて攻勢防御の
体制をとりました。二月二十六日から三
月二十一日までに官軍と会戦すること五
回。山鹿は久留米から兼松を経て植木、
熊本に南下する道路の中間にあたる重要
な拠点であり、山鹿口の戦は田原坂の戦
と同様激戦であったといわれます。

さて、この合戦の間、山鹿市街地はそ
こだけポツコリ穴が開いたように割と穏
やかだったそうです。このとき、熊本協同
隊の有志は、自治制という画期的な実験を行
いました。民政官を決め、人民総代を選挙で
選出し、民政官は人民総代とともに自治政治
を行うという構図のものでした。「鹿児島本営

代理熊本協同隊」の名で「総代」（区長の職掌）
や「総代属」（村用係）の辞令が交付されまし
た。「人民保護兵」という辞令もあったそうで
す。多くの集落で三月中旬に普通選挙が実施
されたようですが、その直後、田原坂を政府
軍に突破されたため、協同隊も山鹿撤去を余
儀なくされ、彼らの理念が現実に着するこ
とはありませんでした。

四、宮崎八郎

嘉永4年（1851年）、肥後国玉名郡荒
尾村（現熊本県荒尾市）の郷士・宮崎政賢・
佐喜夫妻の次男として生まれます。夫妻は八
男三女をもうけましたが、長男、四男、五男
が早世、三男伴蔵も未成年（19歳）で病死。
したがって、次男八郎、六男民蔵、七男彌蔵、
八男滔天を宮崎四兄弟といっています。

幼くして漢文に才を発揮し、神童と呼ばれ
た八郎は、12歳で熊本城下の月田蒙斎塾（剛



宮崎八郎 (1851~1877年)

毅質直、徳性を養うことを重視した)に入門。蒙斎の推薦によって14歳のとき藩校時習館へ入学。郷士としては異例のことでした。19歳の明治3年(1870年)、藩命により東京に遊学、尺振八せきしんぱちに英学、西周あまねに万国公法を学び、西洋近代思想の洗礼を受けます。自由のすばらしさに目覚め、人間は平等であるという思想を身につけてゆきます。

明治6年(1873年)10月に西郷隆盛

らが征韓論争に敗れて下野すると、八郎はその腰砕けの展開に憤激し、同郷同宿の3人の連名で左院(立法院)へ「征韓之議」を書き送ります。これが左院に提出されたのは翌明治7年(1874年)2月になりますが、その間、同年1月に高知の武市熊吉らが起こした岩倉具視暗殺未遂事件いわゆる喰違の変の嫌疑を受けて一時入獄されます。

同年2月、佐賀の乱が起きると、江藤新平を応援するため八郎は急遽帰熊しますが乱はわずか一日で平定されます。八郎はそのエネルギーを外に向けるかのように、同年4月台湾事変が起きると、50名の義勇兵を率いて台湾に出兵します。中国への渡航も企てますが、しかしマラリアにかかり、ほうほうのていで帰熊。荒尾の実家でくすぶっているとき、弟の伴蔵が東京からルソーの「民約論」を持ち帰りました。

五、父・宮崎政賢まさひかたの教え

初名は長兵衛のちに長蔵と改名。政賢51歳の時に明治元年（1868年）となります。熊本藩知事の改革により、戸長（現在の町村長）に任命され村の世話役となります。しかし、東京に遊学中の八郎が、生活のために父が小さな官職に付くことを嫌ってしきりに辞任を願ひ、政賢は戸長を辞します。

政賢は、情に厚く子女の教育に熱心で、家は文武道場のようにであり、窮民のため家政を顧みず私財を注ぐ事を惜しまなかったといわれます。三池藩内の干拓事業に引き込まれる形で関与し、近隣火災の後始末を背負い込むなどして晩年には宮崎家の家産は傾き困窮を極めました。「金納によって下層の武士となるよりも、上層の庶民であれ」という思想であり、末子の滔天が金銭を手に触れると「卑しいマネはするな」と厳しく叱り、また「豪傑

になれ、大将になれ」と日々言い聞かせていたといわれます。八郎の死から2年後の明治12年（1879年）10月、脳溢血で死去。享年62。

大柄で長刀の名手であった妻の佐喜もまた「男子が畳の上で死ぬのは何よりの恥辱」と子供たちに言い聞かせる武の家の気風でした。政賢の死後、佐喜は家財を質に出すなど苦勞して息子たちに学問を続けさせました。

六、宮崎兄弟と生家

宮崎家の祖は筑前三笠郡宮崎村の住人で後肥前国佐嘉に移り鍋島侯に仕えました。正保4年（1647年）正之が荒尾村に分家移住し荒尾宮崎の祖となります。子孫は代々細川藩に仕えて一領一疋の郷士の待遇を受けました。九代長兵衛政賢の時、ゆれ動く明治維新の中で宮崎家の四人の兄弟の行動は異彩を放ちます。

宮崎八郎（1851～1877年）次男

ルソーの「民約論」を經典とする植木学校を創設。西南の役が勃発すると民権家同士で熊本協同隊を結成し薩軍に合流。熊本県八代市萩原堤において27歳で戦死。

宮崎民蔵（1865～1928年）六男

貧農救済の立場から土地問題を志しました。欧米視察旅行後、荒尾村村長となり、翌年、土地復権同志会を組織し、「土地復権論」をもとに運動を進めました。孫文らとも心交があり、孫文の三民主義の中の「民生主義」における「平均地権」の考え方にも同趣旨の思想が生きていると言われます。辛亥革命後に中国に渡って革命の援助を行いました。滔天の良き理解者であり援助者でした。

宮崎彌蔵（1867～1896年）七男

養子にゆき、島津姓を名乗りました。明治20年（1887年）に中国への志を滔天に

吐露、滔天の目を中国問題に向けさせました。自ら中国人になり切ろうと横浜へ出て商館のボーイとなり、頭を辮髪べんぱつにして、中国革命とそれにもとづくアジアの解放をめざして活動をすすめていましたが、志半ば病に倒れました。

宮崎滔天とうてん（1870～1922年）八男

兄彌蔵の影響を受け、中国革命支援のため、献身的に活躍しました。孫文の日本滞在を可能にする一方、革命派の一方のリーダー、黄興や宋教仁らと孫文との画期的な同盟に尽力しました。

明治20年代に入ると、国内では自由民権運動が衰退し、強大な明治国家体制が確立します。一方、中国は当時、疲弊した専制王朝の清朝の支配下にあり、列強の侵略にさらされていましたが、中国の知識人たちは祖国の変革を模索し始めており、中国に革命が近づ



宮崎兄弟の生家・宮崎兄弟資料館入口



宮崎兄弟資料館（左）・宮崎兄弟の生家（右前方）

明治六年以来、政府政（まつりごと）を失し、奸吏位を竊（ぬす）み、賞罰は愛憎に出で、政令は姑息を究め、苟且偷安（こうしよとうあん）、一時しのぎ）、外国際の権利を失し、内末世の兆候を呈す、是れ人民の久しく痛憤切齒する所なり、此時に当り、政府は更に刺客を遣り、西郷陸軍大将を刺んとす、事由発覚、凶徒縛に就く、此に於て西郷大将朝廷に問ふことあり、則ち東上の専使を派す、時に鎮台は市中を焼毀し、県吏は罪人を解き、所在に放火せしむ、良民等周章狼狽為す所を知らず、是実に国賊にして天人共に容れざる所なり、我輩多年の宿志を遂ぐる此時に非ずして何ぞ、乃（すなわ）ち同心協力断然暴政府を覆し、内は千載不拔の国体を確立し、外は萬国対峙の権利を恢復し、全国人民と共に真成の幸福を保たんと欲す、是我輩の素志なり、我輩の義務なり。

宮崎八郎起草の「熊本協同隊挙兵の趣旨」（読みやすいように、カタカナ書きをひらがな書きにかえて記載しました。）



宮崎兄弟資料館の「宮崎八郎」コーナー。右下に宮崎八郎起草の「熊本協同隊挙兵の趣旨」が見えます。

く気運がありました。滔天と兄の彌蔵は、閉塞する日本を飛び出し、孫文らの新生中国運動に夢を託したのです。

宮崎兄弟の生家の説明板に、孫文が滔天と綴った筆談の書や、孫文が親しんだ庭にある梅の古木、泉水、味噌蔵、それに滔天がシャム（現タイ）から持ち帰った菩提樹等が当時の様子を偲ばせているとあります。

孫文は宮崎家を二度訪れました。一度目は日本へ亡命中の明治30年（1897年）の秋、滞在は十日に及びました。二度目は清朝を倒した辛亥革命一年余り後の大正2年（1913）3月。いったん掌中にした中華民国臨時大總統の地位を軍閥にむしり取られて日本への再びの亡命中でしたが、宮崎家の人々への感謝のために訪れました。

同敷地内にある宮崎兄弟資料館は、近代の

黎明期、激動の明治にあつて、近代日本の在り方に全身で立ち向かった宮崎四兄弟の生の軌跡を振り返ることができる資料館になっています。

（元九州職業能力発達大学教授）

【参考にした図書とサイト】

（1）山本博昭・著「近代を駆け抜けた男 宮崎八郎とその時代」、書肆侃侃房、

2014年9月発行

（2）宮崎八郎―ウィキペディア

（3）宮崎政賢―ウィキペディア

（4）くまもとLOOK・ふるさと寺子屋

「宮崎八郎とその時代」

（5）「孫文と共に世界を変えようとした宮崎

滔天」(imidasオピニオン)